

王船山の文學思想について

船津富彦

明末清初に活躍した王夫之（一六一九—一六九二）⁽¹⁾字でいえば船山は中國の思想史上では唯物主義者として、又、政治史の上では明の遺臣として異民族の清朝への果敢な抵抗を試みた人物として、さらに、後世への甚大な影響を與えた人として、最近、中國の學界でも注目をおび、いろいろと研究が發表されている。⁽⁴⁾

然し、船山自身は決して錢謙益（一五八二—一六六四）の如く明・清の二王朝に仕えた文人でもなく、黃宗羲（一六一〇—一六九五）の如く清朝に抵抗しつつ思想家として生涯を終えたのでもなく、顧炎武（一六一三—一六八二）の如く小學を専心に追究したのでもない。船山は抵抗の儒者として、不安な社會に自己の信念を通した人として、中國人の崇敬の的となった。その人が多忙な間において折りにふれて述べた種々の著作の中の一つである文學論は現在でも多くの價值ある問題を含む。それ故、多くの研究者が興味を引き、いろいろな面からすでに論ぜられ、最近では、陳友琴氏が「關於王船山の詩論」⁽⁵⁾（王船山學術討論集）で、立意和取勢、強調獨創性、比體到直言、關於與觀群怨、關於情景相生、反對琢字琢句講死法などの目次でその概説を試

み、船山の主張の概略をほとんど紹介し盡しているかに見える。このように多くの人々に注目されれば、されるほど、その根底に存在するものについての考察が必要になつてくる。ところが、實はこのような點はあまり考えられていない。わずかに、船山は若い時から儒學を學んだのでその影響があると、簡略に指摘されるのみである。⁽⁷⁾然し、この影響は船山文學論の根本には存在するが必ずしも船山の文學論の主流となり、それが眞の特色であるとは認め難い。それよりも、もっとも強烈に影響を與えているものとして、論者は時流の文學論に對する激げしい抵抗の精神の現れと、唐代文學論に對する傾斜とを新しく問題として提起する。即ち、船山は當時すでに權威ありとして、一般に是認されていた事實に對し、勇敢に異説を立て、これらに破壊作業を行ひ、その上、獨創的な思考を進行せしめていった。このような行爲は新しく物を創作する上において、最初に必要とすることであつた。これは溫和を宗とする中國の文學批評の世界では餘り見當らない激しい行動でもある。また、唐代文學論に對する傾斜は盛唐詩を最上とする船山の詩論を考察するのに大きな意味をもつ。特に、船山が善とする作品と、その評價の基準との間に種々なる問題が生ずる間隙が生まれた。

それ故、論者は船山の二つの問題點が何故、彼に意識されたのか、それは如何なる影響を船山の文學論に與えたか、それからどの方向に展開をしていったか、ということに論點を絞って考察を加えたい。

二

まず、これらの問題を論ずるに當つて、王船山の著述の書かれた時代と、その内容について一應考えねばならない點がある。それは船山の隨筆集の一つである「夕堂永日緒論」の「序」によると

余 東髮より業を経義に受け、十六にして韻語を學ぶ。古今 作る所の詩を閱みすること十萬を下らず、經義もまた數萬首。

と記す。この記事は表現の面でややオーバーな感じがなくはないが、東髮つまり、成年になつて經義、即ち當時受験の文である八股文を教えられ、十六歳から作詩を學んだという。これは中國人の學習習慣からみて決して餘り早い年齢とは云えない。然し、その讀書力は甚しく旺盛であつたようで、七十四歳で歿した船山としては詩が十萬首、文が數萬とは明末清初の戦亂を考慮に入れると毎日相當の時間を讀書に費したことになる。このような學力を背景にして作り出された著述は、清史稿の本傳によると、極めて多數あつたらしいが、船山の死後その散佚が甚しく、現在はわずかに「船山遺書」に收められている數十卷にすぎない。この書は人も知る如く清の道光十九年へ一八三九〇船山の子孫の手によつて出版されたが、それは船山の歿後百四十年もたった後である。處が、これも、咸豐四年へ一八五四〇湘潭をおそつた太平天國軍がその版木を焼いたので、現存するものは同治初年、さらに遺著を集めて刊行したもので、このことは、船山の文學思想を考える上で、また、その影響を考察するのに重要な鍵を秘める。

特に、文學論として船山が書き溜めたものは、後に「晝齋詩話」と船山の別號をとつて名づけられたものに收められる「詩譯」に記された十六章の隨筆と、「夕堂永日緒論」即ち序と内編が四十七章、外編が五十二章から成立するものと、「南窓漫記」という名稱をもつ「引」と、三十二章から成る作がその主なものである。

これは清の丁福祜が清代の詩話集を作る時、「船山遺書」の中から前述の三篇をそのまま抜出したもので、さらに一九六一年、人民文學出版社から「中國古典文學理論批評專著選輯」の一つとして刊行されたことは、清代とは政治的、文化的にも大きく異つた態勢の中華人民共和國になつても、そこに何かの意義を認めたからである。これら三種のテキストを校合してみるとその字句にほとんど異同はない。また、これらの成立は決して一時に出來たものでなく、「詩譯」はその成立年代が記録されていないし、それを證明する記事も本文の中から見出し難いが、その内容から考えて恐らく晩年のものであろうか。また、「夕堂永日緒論」はその序によると、「庚午補天穿日、船山老夫叙」とあり、庚午の年は船山在世中二回あるが、「老夫」と記すことから、これだけ内容のある著作は餘り若い時は出來難いと思うので、船山の七十二歳の時、即ち、一六九〇年（康熙二十九年）の庚午と想う。されば船山の死去の二年前の作の序である。特に、補天とは、「淮南子」の「覽冥訓」に、「女媧 五色石を鍊り以て蒼天を補う」の故事により、正月二十日に江東で行う風俗であるが補天という熟語には世運を挽回する意も後世は生じているので、船山は明朝に對する愛國心を巧みに懸けたものではあるまいか。

さらに、「南窓漫記」はその引に「戊辰天中南窓記」とあるので、一六八八年（康熙二十七年）船山七十歳の時の作である。つまり、制

作年代順からみればこれは前者と逆になる可きである。それをこのよ
うな順にしたのは如何なる理由によるのであるか。それは、これら
の内容からみると、「詩譯」は詩經を中心として詩に關する意見を述
べたもので、本論にも少しく關係のある記事がある。次の「夕堂永日
緒論」はその段落の數も他の二書に比べ斷然多く、本論に關する記事
も特に目につく。それに比べ、「南窓漫記」は船山が當時の詩人に關
する思出の記事を集めたもので、餘り本論には直接關係は少い。それ
故「船山遺書」を編集した時、「詩譯」と「夕堂永日緒論」との内容
が近かつた爲に續いて著録されたのであろう。それを丁氏が「晝齋詩
話」を編集する時、深くも考えずそのまま引用して刊行した爲と思
う。いづれも、船山が晩年まで手を入れていたものであることには誤
りはない。勿論、個々の部分の成立にはある時間の中で一度に出來た
ものでなく、相當長い期間に成立したものであろう。それを一編にま
とめて、著書としたのは、その序で語るが如く、船山の晩年である。
したがって、我々はこれを通して、船山の晩年の定論として受取るこ
とが出來るものと思う。それ故、船山の文學思想を知る大切な資料と
して考えてよい。此を主材料とし、他に「船山遺書」から關係ある資
料を補助として、問題點を追究してみる。

三

まず、船山は在來、甚しく權威ありとし、認められ、尊重されてい
た幾つかの學說に對し、強く反對する傾向があるが、その一つとし
て、「詩譯」卷一のその十四で

謝靈運は一意に回旋往復し、以て思理を盡す。之を吟ずるに人の十
躁（さわがしいこと）の意をして消えしむ。小宛（詩經・小雅）は

抑も僅かに此れならず。情相しい若き、理 尤も勝に居るなり。王敬
美 謂えらく、「詩は妙悟有り、理に關するに非ざるなり。」理に非
ずして抑も將何はたをか悟らん。

と問題を提示する。これは船山が王世懋へ一五三六一一五八八字で
いえば敬美、擬古派の一方の旗頭、王世貞の弟であるが、その王世懋
の「詩に妙語あり、理に關するに非るなり」という說に對し、船山が
強く反對をした章である。敬美は船山にとっては三十年以上も過去の
人であるが、その説は當時 一般に盛んに流行していたのであろう。
これに對し、船山は劉宋の謝靈運（三八五—四三三）の詩はそのいわん
とする意が反復して表現され、思理 つまり、詩を作る時の心境が充
分表現されているという。この思理という熟語はすでに劉纏へ四六五
「——」の「文心雕龍」の「神思篇」に「吟詠の間に、珠玉の聲を吐納
し、眉睫險の前に、風雲の色を卷舒するは、其れ思理の致か。故に思
理の妙たる、神は物と遊ぶ。神は胸臆に居りて、志氣は其の關鍵を統
べ、物は耳目に沿いて、辭令は其の樞機を管す。樞機方に通ずれば、
物は貌を隠すことなく、關鍵將に塞がらんとすれば、神は心を遯ひそるる
こと有り。」とあり、文章を作る時の想像力のはたらきの在り方を、
かくの如く説明する。即ち、謝靈運の作を吟ずると人の十躁の意、つ
まり、さわがしい批評などは消えしめてしまうほど名作が多いと論じ
ている。なお、「夕堂永日緒論」「内篇」その三で「意を以て主とな
し、勢 之に次ぐ。意中の神理なり。唯だ謝康樂（靈運）能くならず。」
と、再びその優秀さを論證するし、船山はその著「古詩評選」に古樂
府歌行に四首、小詩に三首、五言古詩に二十六首を引用する。特に五
言古詩はもっともその引用數が多い。そして、「情 相しい若き、理尤
も勝に居る」作品として、「詩經」「小雅」の『小宛』を擧げる。この

作は「毛傳」では、大夫が幽王をそしつたといひ、鄭玄は厲王をそし
るといふ。その詩は

宛彼鳴鳩 宛、彼の鳴鳩
翰飛戾天 翰、飛んで、天に戻る
我心憂傷 我が心、憂傷す
念昔先人 昔の先人を念う
明發不寐 明發、寐ねず
有懷二人 二人を懷う有り

人之齊聖 人の齊聖なる
飲酒溫克 酒を飲み温克する
彼昏不知 彼の昏にして知らず
壹醉日富 壹に酔うて日に富む
各敬爾儀 各、爾の儀を敬い
天命不又 天命、又びせず

中原有菽 中原、菽、有り
庶民采之 庶民、之を采る
螟蛉有子 螟蛉に子有り
蜾蠃負之 蜾蠃、之を負う
教誨爾子 爾が子を教誨するに
式穀似之 穀を式て之に似せん

題彼脊令 彼の脊令を題に
載飛載鳴 載ち飛び載ち鳴く

王船山の文學思想について

我日斯邁 我、日に斯に邁く
而月斯征 而、日に斯に征かん
夙興夜寐 夙に興き夜に寐ね
無忝爾所生 爾の所生を忝むるなかれ

交々桑扈 交々な桑扈
率場啄粟 場に率って粟を啄む
哀我墳寡 哀し我れ墳寡
宜岸宜獄 岸に宜しく獄に宜し
握粟出卜 粟を握って出でて卜す
自何能穀 何により能く穀ん

温々恭人 温々たる恭人
如集于木 木に集るが如し
惴々小心 惴々たる小心
如臨于谷 谷に臨むが如し
戰々兢々 戰々兢々
如履薄冰 薄氷を履むが如し

と歌う。この詩の何處に理と情があるのか、船山は具體的に説明して
いないし、船山の詩經に關する注解を集めた「詩廣傳」の「小宛」の
章にもふれていない。ただこの詩を通讀すると一つの論理によつてつ
らねられてゐる如く讀み取れる。つまり、「夕堂永日緒論」「内編」
その三十六の

小雅鶴鳴の詩、全て比體を用い一句を遺破せず。三百篇中の創調な
り。要は以て物理を俯仰して之を咏歎す。用て理を見、物に隨いて

顯る。唯人の感ずる所、皆類通すべし。

とあるのと同じである。このように文學で理を尊重することはすでに六朝の文學論で極めて高く評價されて用いられている。例えば陸機の「文賦」にも「理不勝詞」とあり、「文心雕龍」の「論說篇」で「聖哲の彛訓を經といい、經を述べ理を叙するを論と曰う。」といい、さらに、「夫の論の體たるを原ぬるに〈中略〉必ず心と理をして合せしめ、彌縫してその隙を見わすことなからしむ。」といい、さらにその贊で「理は言に形われ、理を叙して論となる」と主張する。その他、「議對篇」或は「總術篇」でも理をいう。また、鍾嶸も「詩品」の「序」で「理その辭に過ぐ」と、理を意識する。唐の皎然は「詩式」の「詩有七得」の章の第一に「理を識る」の目をかかげる。つまり、文學の表現における理をいっただもので船山の主張する理はこの流れに屬するものである。この考えが船山の文學評價の基準の一つであったように、「夕堂永日緒論」「外編」その十六で

萬曆中年に當り、但調 橫行の下 張君一へ以誠有り。理に入る
いまだ深からずと雖も獨り雅度を存す。

という評が見出される。つまり、張以誠の作には少しく理がある故よいという。このような態度は、詩經の評論である、彼の「詩廣傳」へ卷二「論東方未明」その二にも「聖人者、非獨能裕於情也、其裕於情於理也。」などにも見出される。船山は文學表現の望ましいものの一つとして、何時も、理といることを強く主張していたようである。特に、彼は理と情との調和を試みている處に船山の文學論の一つの特徴がある。然し、船山が、「讀四書大全說」へ卷九で、「理を得る自然に勢をなす」といい、「宋論」へ卷七でも「必然の勢に順うは理なり」と論ずるは理勢合一で同じ精神を根據としているが變化して表れ

るといふ哲學的な考えにやや近いようである。その根元は異っている。

四

然るに、當時、王世懋は「詩に妙語あり、理に關するにあらざるなり」といふ説を強く主張していた。この考えは人も知る如く、宋代に嚴羽が「滄浪詩話」の「詩辨」で、「大抵 禪道は惟だ妙悟に在り。詩道もまた妙悟に在り」といい、また「詩に別才有り、書に關するに非るなり。詩に別趣有り。理に關するに非るなり。」をふまえたものである。宋の魏慶之の「詩人玉屑」へ卷一にもこの句は引用され、また、當時、李夢陽などにも甚しく「滄浪詩話」は尊重されていたのである。その爲、李夢陽を始め格調派は詩に理を用いることを極力反對していたようである。船山はこのような當時の主張に對し、前述の如く理の尊重を説き、時流に對し強く反對をしたのである。その反對も、本文で「之を吟ずるに」といつているのを見ると、これには作詩者としてではなく、むしろ、誦詩者としての立場で論じているように受取れる。その反對の原因としては觀念的でやや論理性が缺けているように思われる。即ち、その引用の作家例からみてもその資料が少く、また船山が哲學的に思索の出来る限り考えて得た結論でなく、いわゆる、思いつきであり、作家として考えたのではなく、復古的な範圍を出していない。然し、時流の權威に對し、船山が強く反對をしていることは事實である。ただ、明のほぼ同じ時代の馮班が「滄浪詩話糾謬」で同様に反對をしているのを見ると、當時、このような考えが發生し易い状態であったのかも知れない。ただ、船山がその反對表現に斷定的な表現を用いず、疑問的表現を用いている處を見ると、或はそれほど強いものではなかったかも知れない。逆に、斷定的な表現が用

いられぬ程、王世懋の主張は一世を風靡していたとも云える。若しも、それならば、船山のこの主張は強烈な抵抗の文學論といえる。

五

次に、「夕堂永日緒論」「内編」その五で

「憎は敲く月下の門」は祇だ是れ妄想、揣摩して他人の夢を説くが如し。縱令、形容酷似するも何ぞ嘗て毫髪も心に關せんや。然るを知るは、其の推敲の二字に沈吟するを以て就ち他れ想を作すなり。若し、即ち、景心に會せば則ち或は推し、或は敲き、必ずその一に居らん。景に因り、情に因るは自然の靈妙、何ぞ擬議するを勞せん。

と、船山は當時盛んに尊重されていた唐の賈島へ七七九—八二九の有名な逸話をあげて、詩文を作る場合に字句を精練することに強く反對をしている。船山はその原因として、自分の考えで人のことを推量することは誠にらちもない。あたかも、他人の見た夢を自分が見た如く説明するのと同じであるという。さらに「形容酷似するも何んぞ嘗て毫髪も心に關せんや」といい、甚しくつまらぬことだという。そして、その理論的根據として「若し即ち景、心に會せば則ち或は推し、或は敲き必ずその一に居る」と論斷する。つまり、もつとも適切な表現は一つしかない筈だという。それを二つもの表現を考えるのは甚しくおかしいといい、そしてその表現が二つ考えられるのはほんとうに心を強く打ったものがないからだ、と、自説を展開する。船山のこの考えは、理論的には、確かに或る感情の適切な表現は一つしかないであろうが、問題は實際に作詩してみると、いずれが表現としてより良いか、甚しく迷うことはしばしば存在する。このように、文學表現にお

いて、推敲を否定する考えは唐代詩論においても微弱ではあるがその存在が認められる。(後述) この船山の考えも論理としては一應は考えられるものではあるが、少くとも、詩人として、文人としての立場から考え出したのではない。何か時流に對する激げしい憤りがその底流にあつて主張されたように受取れる。

六

さらに、船山は當時、何の疑いもなく使用されていた、いくつかのことにも、その注意を喚起する。その一つとして、「夕堂永日緒論」「外編」その二十三で

代字の法有り、詩賦に之を用う。月には望舒と曰ひ、星には玉繩と曰うの類の如し。或は點染を以て色を生ず。その佳なる者は正爾情を含む。然して漢人と李・杜・高・岑に及びて屑しとせざるなり。之を景物に施せば已に第二義に落つ。況や字は本と活にして死句を以て之に代えんや。敬の如きは則ち是れ敬、更に字の代う可きなし。敬する所と敬する所以とは正に自ら指す所に隨いて異なる。代字を用ゆる者は欽翼・兢惕を以て之に代え、或は怠荒・戲諭を以て之に反う。直に是れ敬の字を識らず、支吾抵塞するのみ。信は惇篤と曰い、仁は慈祥と曰い、學は敏求と曰い、思は覃精と曰い、善は純粹と曰い、治は經理と曰うは皆代字なり。先輩中また此の病有り。

と、主張する。即ち、船山の考えによると、詩賦でよく用いる月という文字の代りに望舒といい、古く「後漢書」の「蔡邕傳」に「元首覽なれば則ち望舒の眺め」とあり、その注に望舒は月という。星を玉繩というは、張衡の「西京賦」に「飛闐に上りて仰眺し、正に瑤光と玉

繩とを観る」とあり、六朝詩人にしばしば用いられている古典的な使用である。これもその巧みな用い方によれば非常にその効果を音の上からと表現の上から擧げることが出来る。けれども船山は、漢人と唐の李白・杜甫・高適・岑參は餘り好んで用いないという。それであるうか船山の撰する「唐詩評選」にはこれらの作家の詩を多く撰ぶ。特に、景物を表現する場合には餘りその効果はないという。例えば、敬の字は何處までも敬である。この考えは前述の推敲否定説にもつらなっている。また、その使用法を誤るとおかしくなるが、先輩達の中には時々この誤りを犯しているといいながら、その姓名を擧げるのを遠慮している。これは當時このようなことが盛んに行なわれていて如何にも代字を用いることにより、その表現に己の博識を示し、奇をてらっていたからであろう。このようなことは時流に對する反抗であつて、逆に、やや、復古的な香が強い。

七

また、疊字について、同じく、そのの十四で疊字は析きて用ゆべからず。詩賦の悠々としてを悠と云い、迢々としてを迢と云い、渺々としてを渺と云うが如し。皆語を成さず。就々業々、舊と此の文有り。また甚だ雅ならず。業々というは筍處崇牙を上る如く、兩々相い次し、齟齬して相い安んぜざる象なり。時文に一字を絶去して就業という。單一の業の字を知らず。則ち止だ是れ功業、就の字を連ぬるのみ。如何ぞ文理を成すを得んや。此の病は先輩また有り。密川南・趙儕鶴の諸公の如きは則ち必ずしも此の生活を作さず。

という。これは疊字 即ち、同一文字が二字重つて熟語を作る時、そ

の一字では意味がなく、その疊字が連語を作る時、その各々の一字を以て熟語を作つても意味をなさぬという。當時このような習慣が行なわれていたようで、船山はこれに對して文理が續かないと反對をする。勿論、船山の云う如く、これは文意をなさないが、當時としては斬新な表現として流行していたようで、このような時流の新語使用にはその二十二でも強く反對をしている。即ち復古的な船山にとっては甚しく堪えられぬものがあつたようである。即ち、儒教的な雅をより多く尊重する船山にとっては、このような俗な表現形式は精神的に堪えられなかつたようで、それ故か、後述する如く、さらに、このような感情は當時盛んに詩文に用いられていた俚語の否定という方向になつていった。このように、當時の權威に對し、俗流に對し、船山は素直に信じ、従うことは出来兼ねたのは何か根本の問題がその根底には存在していたようである。

八

このような感情はさらに、また、當時一定の規律とされ、少しも誰にも疑問視されていなかったことに對しても大きな疑いを持つようになつた。例えば「夕堂永日緒論」内編「その十七で提出する問題である。即ち、船山は

起承轉收は一法なり。試みに初盛唐の律を取り之を驗するに、誰か必ず此の法を株守する者ぞ。法は成章に要むるなし、此の四法を立つれば則ち章を成さず。

と主張する。そして、その論證として

且つ道え。「盧家少婦」(沈佺期「古意」)の一詩は何の解を作すや、是れ何の章法ぞ。又「火樹銀花合」(蘇味道「正月十五夜」)の如き

渾然たる一氣、「亦知成不返」へ杜甫「擣衣」は曲折端なし、その他或は六句を平鋪し、二語を以て之を括る。或は六七句、意已に餘りなし。末句は飛白の法を用いて颯開し、義趣超遠、起は必ずしも起ならず。收收は必ずしも收ならず。乃ち生氣をして靈通、成章にして達せしむ。「故國平居有所思」へ杜甫「秋興」の、「有所」の二字虚籠して喝起す。以下、曲江、蓬萊、昆明、紫閣、皆 思う所のもの若きに至る。此れ大雅より、謝客へ謝靈運の五言の長篇、用て章法となす。杜へ甫は更に鋒を藏して露さず。搏合 垠なし。何んに起り何んに收らん。何に承け何んに轉ぜんや。陋人の法烏んぞ駢驥の足を展すに足らんや。

とい

近世 唯だ楊用修(慎)之を辨ずること甚だ悉し。用修は用法に工なり。唯だそれ能く陋人の法を破んや。

と説明する。この楊用修は「内編」のその十九・二十二にも登場する人物である。随つて、船山の「明詩評選」には楊慎の多くの詩が選ばれている。船山はさらに、その十八で

起承轉收、以て詩を論ず。用て幕客をして應酬を作すを教うるに、或は可なり。其れ或は可なる者、八句 自ら一首尾をなす。塾師乃ち此を以て經義の法を作す。一篇の中、四起回收す。

と、述べる。この起承轉收という熟語は餘り見なれぬ語で、人も知る如く、律詩の名稱は起聯・領聯・頸聯・尾聯の名稱を一般に用いるが、この説にやや近いものとして、明の梁橋の「水川詩式」の五言律詩の條に、「律詩有起有承有轉有含」といつているのが見出される。つまり、尾聯を合といひ、收という用例は餘りないようである。その起承轉收について、當時どのように考えていたかというに、梁橋は

起を破題となす。或は景に對して興起す。或は比起す。或は事を引きて起す。或は題に就いて起す。突亢高遠にして狂風の浪を捲て、勢 天に滔せんと欲するが如し。承を領聯と爲す。或は意を寫し、或は景を寫し、或は事を書し、或は事を用いて證を引く。前聯の意と相い應じ相避く。變化は疾雷の山を破り觀る者の驚愕するが如らんことを要す。合を結句となす。或は題に就きて結ぶ。或は一步を開く。或は前聯の意を繳す。或は事を用い、必ず一句を放ち、散場を作す。剡溪の棹の自ら去り自ら回るが如し。言は盡くること有りて意は窮りなし。

と説明する。船山はこのような規定の法則性に對し、強く反對をしたのである。さて、このような起承轉收説は誰によつて、律詩入門の法則とされたか、筆者は淺學にして知らない。が、船山の頃は一般に知れわたつたものであつたやうで、多くの人々は、この法則により、詩を作り、その作品の善惡を論じていたやうである。これに對し、誰も が不審に思つていなかつたやうであり、勿論、すべての作が起承轉收によつて論じられるものでもない。その例外は當然 存在するものである。それ故、船山もそれを知つていて、「一法也」といつている。いづれにしても、船山にとつては一つの法則によつてすべてを統一することに相當の抵抗を感じたのであろう。

九

また、「夕堂永日緒論」「外編」その十一で

皎然の「詩式」有りて後詩なし。「八大家文抄」有りて後文なし。

此の法を立つる者、自ら謂らく、善く童蒙を誘うと。童蒙を引きて荆棘に入るは、正に此に在るを知らず。

という。即ち、船山にいわしむれば、唐の皎然が詩についての法則を著述した「詩式」が出来てから、後人はその法則にのっとって詩を創作するようになった爲、遂に名作といわれるようなものが生れなくなったという。また、茅鹿門(坤)が「唐宋八大家文抄」(百六十卷)を選し、後人がこれを愛讀し、それを手本として文を作るようになったから、文學の自由な表現がなくなったという。船山は、これについて、その十、「内編」その十二でも、繰返してほぼ同様の意味を述べる。問題は、皎然の「詩式」と、茅鹿門の「唐宋八大家文抄」のみにその責任があったのではない。詩について云えば、不完全ではあるが王昌齡の「詩格」があった。文集についても他にもいろいろ存在する。ただ、「詩式」は不完全な一巻本系統のテキストが當時は流布されており、「氷川詩式」にもその一部が引用されている程である。船山のいう如く、兩書ともそれほど害があったと思われない。寧ろ、後述する如く、皎然の「詩式」の文學論の影響を強く受けていることは注目すべきである。恐らく、船山としては何んとなく、法則に對する強い反抗と見る可きだと思ふ。然らば、如何にすれば、理想の詩や文が作られるか、船山の主張はその反對説によつて推量すれば、何も法によらず、自由な表現を好んだように言外に讀み取れる。思うこと、云いたいことを自由に表現することは、逆に、云いたいことが自由に云えなかつた船山の心の叫びであつたかも知れぬ。中國の文學論の中で、顧炎武などと共にこのように形式に束縛されることに反對をし、自由な表現を叫んだ少數派の一人である。その意味でも極めて斬新なものとなる。ただ、その自由は形式に對する自由であつて、内容に對する、精神の革命ではなかつた。つまり、形式と内容に對する自由の主張でなかつたのは、この時代の自由が、そこまで意識されなかつたのと、船山自身が封建社會の支配者階級で、精神的解放を意識しなかつた爲であろう。船山の詩文集をみてもこの説は餘り實行されていない。即ち、實作と理論の間に大きな間隙があるように思われる。さらに、當時一般に流行していた經義(八股文)派に對しても良い感情を持つていなかったことが「畫齋詩話」の中で述べられている。

一〇

このような態度は、特に權威をもつて當時の詩壇を風靡していた文壇グループの行動にも眼を向けていった。それは、明代には當時「山人」と呼ばれる民間の詩人が各地に生活の爲、資を求めて歩き、特に、地方の大官や金持に詩文を賣りあるき、それらが時にはその地に定住し、それが一つの核となつて、詩を愛する市民を含めて、結社が生じ、各地に流行していった。これらはその師と稱する人々も學問は淺く、生活の爲、貴人、金持におもねつた爲、その害は地方文化の向上という長所よりも多くの弊害が認められた。特に、グループの派閥の害は甚しいものがあつた。船山はその状態を「纒立門庭即趨魔道」「夕堂永日緒論」「外編」その三十一でいう。そして、船山は自らもその流れに加わり、その泥をあげようとはせず、極めて、冷靜であり、批判的であつた。それを物語る如く、「夕堂永日緒論」「内編」その二十九で

門庭を建立するは建安(一九六—二二〇)より始まる。曹子建は鋪排(ならべる)整飾(ととのへかざる)し、階級を立て、以て人を賺(あそむ)き堂に升す。此を用て諸の趨赴(あそむ)の客(はしりおもむく客)を致し、容易に名を成し、紙を伸べて揮毫し、雷同一律す。

と、論ずる。が、この文意の裏には明の時代における門庭の害を諷し

ているように思われる。船山にいわしむれば、門庭、即ち、文壇の成立は早くも魏の建安年間とし、特に、曹子建、すなわち曹植が詩人達を集めて、グループを形成した爲多くの人々がそこに集まったという。そしてその功罪を巧みにつく。このような見解は筆者の知る限りでは餘りこの點で論争はされていないようで、甚しく獨創的な見解の如く思われる。その結果であろうか船山は不當に曹植の文學を低く評價する。例えば、「詩評」その一で「亦奚必賢於曹劉沈謝乎」という曹は曹植を指すのであろう。これを證する如く、「古詩評選」では、曹植の作は古樂府二首、四言一首、小詩一首、五言古詩、三首のみで多くを選ばない。そして

子桓（曹丕）は精思逸韻以て人の攀躋を絶つ。故に人の樂從せず、反つて掩う所となる。子建は是を以て阿兄を壓倒し、その名譽を奪う。實は則ち子桓は天才駿發、豈に子建の能く壓倒する所ならんや。故に是に嗣ぎて興る者、郭景純（璞）、阮嗣宗（籍）、謝客（靈運）、陶公の如きより、乃ち左太冲（思）、張景陽（載）に至るまで、皆指を建安の羹鼎に染むるを屑しとせず。子建を視ること蔑如たり。

といい、その三十一でも

曹子建の子桓における仙と凡との隔てあり。而るに人子建を稱し子桓あるを知らず。

と稱える。その根本には文脈の上からは子桓即ち、曹丕は門庭を作らないから良いというように讀取れるが、實際は彼もサロンを形成し、一方の旗頭であったことは多くの資料の示す通りである。それであるにより多く曹植を稱えているのは、すでに六朝時代の鍾嶸の「詩品」に多くの詩人の中から選ばれて、上品に位置づけられている評價

などに對する抵抗とも考えられる。その偉大さの證明として「古詩評選」に、古樂府十六首、四言二首、五言古詩九首の多きを引用する。そして、船山は曹丕の文學の美點を精思・逸韻というが、この精思という熟語は早くも漢の司馬遷の「史記」二二三卷の「鄒陽傳」に

「竭精思欲開忠信」と記され、宋の范曄の「後漢書」(卷四十九)の「張衡傳」に「精思傳會十年乃成」とあり、劉勰の「文心雕龍」(指瑕篇)に「古來の文才は、世を異にして驅を争う。或は逸才以て爽迅に、或は精思以て纖密なり。」と用いられ、「物色篇」にも「物には恆姿有りて、思には定檢なし。或は卒爾にして極に造り、或は精思するも愈よ疎なり。」とある。つまり、思いを凝らすことで、よく物事を熟考することである。逸韻とは「文心雕龍」(麗辭篇)に「麗句は深采と並んで流れ、偶意は逸韻と共に俱に發す」とあり、すぐれた韻、つまり、風雅な作品をいう。尙、具體的な例として、船山は「夕堂永日緒論」(外編)その十四で

試みに曹子桓の「典論」論文、范蔚宗(曄)の「後漢書」引語、張思光(融)の自序を取りて、之を讀む。古人文字を作るに研慮以て心を悦ばし、精嚴なること此の如し。

といっている。このように、曹丕の文學を曹植のそれより高く評價した例は餘りないようで、在來は、梁の鍾嶸はその著「詩品」で曹丕の五言詩を中品に位置づけ

その源は李陵に出ず。頗る仲宣(王粲)の體あり。則ち計る所の百許篇、皆鄙質なること偶語の如し。「西北有浮雲」などの十餘首は殊に美瞻にして翫ぶべし。始めてその工なるを見る。何を以て群彦に銓衡し、厥の弟に對揚せんや。

と批評する。それにもかかわらず、曹植の文學を低く見たのは、門庭

の故であつて、何等、曹植文學に對して文學的な理論的根據があつてのことではない。このような評價で、郭景純、阮嗣宗、謝客（謝靈運）陶公（淵明）、左太冲（思）、張景陽（載）を見、それらの作家の作品をその著「古詩評選」に多く引用する。そうして、船山にいわしむると、門庭の害悪はさらに

降りて温（温庭筠）李（李商隱）楊（楊億）劉（劉筠）降りて江西宗派。降りて北地（李夢陽）信陽（何景明）琅邪（？）歷下（李攀龍）、降りて竟陵、翕然として之に従う所の者皆、一時の和哄漢（附和雷同の人？）のみ。

と云う。船山がここで擧げた作家はそれぞれ獨自の價値をもつ作品を生んだ人であるが、船山は門庭をなしたが故に此を退けている。即ち、温・李は、晩唐の詩人で、二人の詩風は綺麗を尊び、大いに流行し、次の楊・劉の西崑體となつたものであり、江西宗派、つづいて、李・何・李・王の派及び竟陵派を強く否定する。この考えは「夕堂永日緒論」「内編」その二十八でも

一の奔を解する者、人に奔を誨へて遊資となす。後に一高手に遇い與に對奔し、十數子に至る。輒之を擲揄して曰く「此れ教師の暮のみ」と。詩文 門庭を立て、人をして已に學ばしむ。人の一たび學び、即ち似たる者は自ら翻りて大家となし、才子となす。また、藝苑の教師たるのみ。高廷禮（高棟）李獻吉（李夢陽）何大復（何景明）李于鱗（李攀龍）王元美（王世貞）鍾伯敬（鍾惺）譚友夏（譚元春）の尙ぶ所は科を異にするも、その歸するは一なり。纒かに一たび門庭を立つれば、則ち但だその局格有るも更に性情なく、更に興會なく、更に思致なく、自ら人を縛縛す。誰か之か解をなす者ぞ。といひ、その四十では

門庭を建立するは已に望を風雅に絶つなり。然してその中に本才情無くして、此を以て安身立命の本を爲す者あり。高廷禮、何大復、王元美、鍾伯敬の如きは是れなり。才情 有り。固に自ら用うるに足りて以て門庭を立つ。故に自ら桎梏する者 李獻吉 是れなり。其の次は則ち、譚友夏、また、牙後慧あり。（人の議論を踏襲すること）

という。このように、船山は李・何・李・王の流派と、竟陵派とに激しい攻撃を行う。随つて、その作品も餘り高く評價せず、船山の撰した「明詩評選」には多くを選ばない。その原因は、これらの流派はそれぞれ自信をもつて、一世を風靡し、船山のいた湖南の地もその詩風が盛行し、目に餘るものがあつたらしい。然し、このように、李・何・李・王及び竟陵派に對する反對は當時、船山のみでなく、すでに、やや、先輩に當る錢謙益（一五八二—一六六四）やその弟子馮班（一六〇二—一六七一）にも見出せる。特に、錢氏は理論的に、それらの學派の缺點をつく。處が、船山が何故に反對をしたかというに、李何李王に對し、「内編」その三十七で

所以に門庭 一たび立てば、世を擧げて「才子」となし、名家となすは故（理由）有り。如し李（夢陽）何（景明）王（世貞）李（攀龍）の門下の厮養と作らんと欲せば、但だ「韻府群玉」「詩學大成」「萬姓統宗」「廣輿記」の四書を買ひ、案頭へ机のそばに置き、題に遇えば、查べ湊め（よせあつめ）れば即ち足らざるなし。

と、その缺點を指摘する。つまり、一度 グループが出来ると、その指導者を世間の人々は無能な人でも、「才子」といい、「名家」と稱えている。そして、時には遊び社會のお師匠さんのようにやたらと金持や貴人に媚びて「才子」「名家」という。實にこのようなものは虚名

で、無意味なものであるといい、特に李・何・李・王の教育方法は低級であるという。即ち、「韻府群玉」「詩學大成」「萬姓統宗」「廣輿記」の四書を求めて、その必要において頁を繰れば、その用は充分に足るといふ。特に、王元美、即ち王世貞について、「夕堂永日緒論」

「内編」その三十二で

元美末年蘇子瞻を以て自ら任ず。時人もまた譽めて、「長公の再來」となす。子瞻時文滅裂多しと雖も元美を以て之に擬せば則ち子瞻を辱しむ太だ甚し、子瞻は野狐禪なり。元美は則ち螺を吹き、鈴を搖し梁皇懺を演ずる一應の付憎のみ。

と悪口をいう。

また、船山は當時盛行していた竟陵派に對しても激しく反抗を試みた。この竟陵派についてはすでに多くの文學史に詳述せられていて、この派は袁宏道を中心とする公安派の變化したもので、萬曆の末年から次の天啓の時代にかけて流行した。その主唱者は湖北省の天門縣出身の鍾惺・譚元春などである。そして、奇妙な措辭と人とは變つた着想や、奇怪な閑寂を歌うのを喜んだと、吉川幸次郎博士は「元明詩概説」で説明する。船山自身も若い時はその詩風を學んだことは、「述病枕憶得」〈王船山詩文集〉に

曰にして教を叔父牧石先生に受け、比耦結構を知る。因りて津を北地へ李夢陽・信陽へ何景明に問わんと擬す。いまだ就ずして中ごろ改めて竟陵の時響に従う。乙酉に至り乃ち古今を去りて己の意を傳えんと念う。

とある。乙酉は明の弘光元年へ一六四五であるから船山二十七歳の時である。即ち、船山が竟陵派の詩風から脱したのはそれ以前である。何故に脱出したのであろうか。たんに門庭にのみ反逆したのでは

なく、「夕堂永日緒論」「内編」その三十で

若し竟陵へ派の唾液を吮んと欲すれば則ち爾るを須いず。但だ就ち大家の誦する詩文、「之」「於」「其」「以」「靜」「歸」「懷」の熟語、字句を湊泊し、措き將て去れば即ち己に居然たる詩格。

といい、その四十五では

唯、譚友夏 渾て青樓にて淫咬を作し、鬚眉盡く喪う。

と個人攻撃を行い、その作詩の指導方法に、表現に多くの問題があると指摘する。が、竟陵派には確にこのような缺點が多かったと思う。

これは船山一個人の意見のみでもなかったように、船山の作である「武夷府君行狀」〈晝齋文集補遺卷二〉によると「詩紹黃初景龍、視公安竟陵蔑如也」とあるので、船山一族の共通した好みであったのかも知れない。特に儒者の香の強い船山には竟陵派の如きは實に甚しく堪えられぬものがあつたのかも知れない。随つて、その著「明詩評選」では彼等の作品を全然無視して選ばない。

然らば、船山は何故に門庭に對して強い反抗を示すのであろうか、

「夕堂永日緒論」「内編」その三十三で

門庭を立つ者は必ず鉅釘へ意味のない詩文を作ることなり。鉅釘に非ずんば以て門庭を立つるべからず。

という。即ち、無意味な作詩をするような凡人でないと門庭は作れないという。逆に云えば、優秀な人物はそのようなものを作らないという意を含める。前述の如く、その四十の一節はこの論をさらに現實として裏付けている。

一一

處が、ここで問題になることは、船山自身も若い頃、友人達と「傲

「匡社」という詩社を結成していたと「家世節録」(臺齋文集卷十)に「崇禎初文士類以文社相標榜。夫之兄弟亦稍與聲氣中人往還」自ら記す。そうした船山が何故門庭に對し激しく反抗したかということである。恐らく、この論は前述の如く、晩年のもので、若い時のそれとは思想的に變つて來たのであろう。「做匡社」は晩年まで繼續していた様子もないので、或はこの矛盾に氣がついて解散したのかも知れない。また、練習の爲に詩文の社を作ることと、ある主張の爲のグループとの間に相違を感じて論じていたのかも知れぬ。高處から見れば兩者の間は近似的な要素がより多く認められるけれど、船山として別に考えていたのであろう。

ここで考えねばならぬことは、船山は門庭を作ることにより互に切磋琢磨するという長所を始め、そのもの持つ美點はすべて忘却してしまつて、問題としないことである。例えば、明末の文學などの流派は、しばしば政治的な運動がそれに關係して來ることが多かつた。船山の場合、餘り政治的なことは割合に他の資料に比べてそれを缺く。恐らく、その政治的活動を窺うべき文あるいは資料、記録はことさら煙滅されて傳わらなかつたのであろう。また、經濟的に門庭を作ることによつて多くの收入があるのを羨む程、船山の心は狭かつたとは思われない。それであるのに、門庭に對し激しい攻撃を行つてゐる。即ち、當時復社を始めいろいろの詩社があり、その害は目にあまるものがあつたと思う。それ故その攻撃も現實に現われた短所のみを前述のように指摘して反對する。つまり、門庭に對し、充分時間をかけて推考し、論じたのでなく、極めて表面的、感情的なことしか見ていない。即ち、門庭を作り、その權威によりかかつて威嚴を張つてゐる人に對し、強い反抗を感じたのである。

また、船山の反抗は、李・何・李・王と竟陵派などであつて、當時流行していた他の學派或はその姓名も擧げていないし全然ふれていない。例えば、船山よりやや先輩に當る錢謙益グループや、ほぼ同時代において獨自の主張をしていた王漁洋の神韻說に對してである。これらについて、船山が全然知らなかつた爲であらうか。如何にしてもこれは不思議なことである。それは、當時著名な人々や、學說について船山のような博識の人が少しも知らなかつたということは常識的に考へても理解し難い。例えば、王漁洋は二十七歳(順治十七年)から三十一歳(康熙三年)まで、揚州におり、江左の多くの詩人とも交り、その名聲も高く、常熟にいた錢謙益を二十八歳の時には訪問し、交際をしており、また錢謙益は當時は偉大な文人として、誰も知らぬ人がいない程著名であつた。これについて、郭紹虞氏は、「中國文學批評史」の「從王夫之到王士禎」の章で、船山の李・何・李・王反對の文學論は漁洋にもそれに近いものがあつたからという。また、錢謙益の主張についても、彼が、李何李王の說に反對をしてゐるので、近似的なものがあつたとは思ふが、それよりも船山にとっては明清一朝に仕えた破廉恥漢、錢謙益について口することは純情の人、船山にとつては甚しく堪えられぬことであつたと考へる。然し、船山が強く意識するほどの缺點が錢謙益に認められなかつたこと、政治的に不安な現實にいた船山としては假りにもその說に反對することは身の危険をより多く感じたからではあるまいか。つまり、庶民の生活の智慧がその反對を控へさせたのであろう。

二二

船山はかくの如き態度を詩のみならず、散文の世界でも強く主張し

ている。即ち、當時、一世を風靡した異端の思想家 李贄 字は卓吾
へ二五二七—一六〇二について、強い反抗の意を示している。こ
れについては、嵇文甫氏が「王船山學術論叢」で「王船山與李卓吾」
の中で述べている。特に文學の面については、「夕堂永日緒論」「外
編」その三十五で

李贄の佞舌を以て天下を惑してより袁中郎、焦弱侯（焦竑）ら搦す
して之を推戴す。是において筆に信せて掃抹し文字を爲りて諂り、
精微を含み高卓を鍛鍊する者を敲畫呷醋（畫を敲み醋を呷む）とな
す。故に萬曆壬辰へ一五九二以後の文の俗なること、古に互りて
いまだ有らず。

と述べているのが注目される。船山は文學の面のみならず他でも李贄
については「搔首問」では

〔王〕龍溪へ一四九七—一五八二〕中峰の説を竊み、貪嗔を以て戒
定慧を癡治し世を惑し民を誣す。李贄その邪陷を益し譙周へ二〇一
—二七〇〕馮道へ八二二—九五四〕を奨めて方正の士を詆毀す。
と述べ、「讀通鑑論」卷末の敘論（三）でも

近世 李贄 鍾惺の流の若き、天下を邪淫に導き以て中夏に衣冠の
禍を醸す。豈に洪水を逾え猛獸より烈なるに非ずや。

と、鍾惺と並べ口を極めて罵る。そして、「俟解」においては一五九
九年 南京で出版された李氏の「藏書」をもっとも害あるものとし、
有志の者は此の書に惑されるなど云っている。確に李贄の言説は反儒
教的で、雅正な船山にとっては堪えられぬものであつたらう。特に萬
曆以後の文學に與えた害毒は甚しいという。

さらに、その一因は李贄の考えが王陽明の致良知説から出ていたこ
ともよるであらう。これについて、船山は「夕堂永日緒論」「外編」

その二十二で

良知の説 天下に充塞し、人 讀書、窮理を以て戒となす。故に隆
慶戊辰へ一五六八の會試「知之爲知之不知爲不知文」を以て集注
を用いず。〔中略〕 人士皆書を束ねて觀ず。

とこの害悪をならべて攻撃する。このような考えは、「張子正蒙注」卷
九にも

王氏の學一傳して王畿となり、再傳して李贄となる。

といっていることから云える。このように王陽明に對しての反對者
は錢謙益も同じであつたと吉川幸次郎博士はその論文で指摘される。
恐らく、當時、一般の風潮として王氏の學説に對して受入れ難いもの
が存在していたのであらう。

隨つて、船山は李贄の詩は認めておらず「明詩評選」には一首も選
んでいない。また王陽明のそれも餘り高くは評價しない。

また、いたく李贄を尊敬する袁中郎に對しても、船山は好意を持っ
ていなかったことは事實であらう。その袁中郎は李贄についてはこよ
なく尊敬していたことは「余 凡そ兩度、雨に冲霄觀に阻まる、俱に
龍湖師を訪れしが爲なり、戯れに壁上に題す 二首

我從觀裏拜青牛 我れ觀裏にゆいて青牛を拜し

忽憶龍湖老比丘 忽ち龍湖の老比丘を憶う

李贄便爲今李耳 李贄は便ち今の李耳たり

西陵還似古西周 西陵はまた古の西周に似たり

と、李贄を今様の老子と稱える。その爲であらうか、船山は「夕堂永
日緒論」「内編」その四十七で、咏物を論じて、「宋人 此において茫
然、愈々工みにして愈々 拙し。〔中略〕 是に嗣ぎて作者は益々匠畫
に趨る。〔中略〕 徐文長、袁中郎 皆此を以て巧に銜う。」と評する。

が、その作品は全面的に否定せず、「明詩評選」には五言古詩一首、七言律詩三首、五言絶句一首を選んでゐる。けれどもその引用詩數からみると、餘り高きは評價されてゐない。かくて、公安派に對しても、恐らく、餘り好意はもてなかつたのであろう。ただ、これらに散見する資料から見ると、船山は公安派の中、袁中道のみを論じ、他の二袁について無視したのか、李・何、李、王を攻撃することに夢中であつたのか、何も述べていないことが問題になる。

なお船山は萬曆の頃、流行してゐた輕薄な文學表現についても、極めて強い反抗の意を示してゐる。例えば、船山が兄の石崖の傳を述べた「石崖先生傳略」(晝齋文集 卷二)に

萬曆の末より時文日びに變ず。始は禪學の餘を承け、繼いで莊列管韓の險澀を以てす。已に乃ち蘇曾を效ね浮冗に流る。後は則ち齊梁の浮豔に追ひ、益々淫曼に趨る。

といい、「文學劉君崑峽墓誌銘」(文集卷二)でも「崇禎間齊梁風靡駢麗爲虛事」とあり、「夕堂永日緒論」「外篇」その十六で「當萬曆中年俚調橫行之下」とか、その十七で「承嘉靖末蘇曾汎濫之餘、當萬曆初、俚調啾嘒之始」また、その四十六で「萬曆後作小題文字、有諧謔失度浮豔不雅者」と述べてゐる。船山にいわしむれば、このような時流の文學はどうも肌が會わなかつたようである。それは幼い時から儒學を學び、雅なるものを美とする教育を受けて來たからであり、何んとなく當世風のもの、やや保守的な船山にはピッタリとしたものがなかつたのであろう。かくの如く、明を否定しました宋の東坡、黄山谷の代表作家を「夕堂永日緒論」「内編」その二十六、三十二、三十三でそしると、殘りは唐以前の文學にしかなくなる。したがって、船山は盛唐以前の文學に價値を認めるが、それなれば如何にある可きか。

船山は反對をし、認めてはゐない割りに、建設的な意見はこの分野でも明言してゐない。或はしなくても當時は雅なるものが當然であり、理想のものであつたからであらうか。それにしても、船山は破壊の力の強さに比較して、前述の如く、その建設力は極めて弱かつたようである。その爲か、新理論を立て、さらに獨自のものへと充分には展開をしなかつた。つまり、獨創的な創作力を欠いてゐる。このことは我々に大きな問題點を提起する。即ち、船山はその問題點について本能的に直感で把握したが、それを論理的にまで組立てる思考性に缺けてゐた。また、反對をするに必要な多くの資料を缺いてゐたこと、さらに、密文甫氏が「王船山詩文集」の序で述べる如く、自己の現實生活の苦しみの中から考へた爲である。その爲、他の面まで考へてみると、この苦しみから考へた爲であらう。さらに、船山が直情的であり、感情的であり熱情的であつたことと、明末清初の政治的な多忙の間に述作した爲でもあらう。これらはとかく、物事を破壊し、革命を起す場合の初期の人々に現れ易い現象の一つでもある。それは、熱情的でない、多くの人々の感情を動かすことは難しい。即ち、船山は、より多く情の人であつたように思われる。したがって、短所のみを考へるに急であつて、長所を助長するということは殆んど試みなかつた。

次に、船山の文學論の大きな特徴は、彼が主に作者としての立場から考へたのでなく、どちらかと云うと、讀者として、批評家としての立場から思考したものである。このことはすでに郭紹虞氏によつて論述されてゐる。が、船山は何時も批評家として意識したのでなく、時には微弱であるが作家としての意識をもつて考へていたようである。ただ、それが強く表面に現われて來なかつただけである。その爲

批評家船山としての顔が強くて出てくる結果となった。

また、その生涯をみると、實に不安な社會で多くを費し、落ちついて、充分な資料を手元においてその思想を錬るといふことが出来兼ねたということである。このようなことがややもすればすぐれた船山の文學論が、獨創性のない啓蒙的なものになり易い一つの原因があったと思う。

一三

ただ、船山の文學論をみると、何んでもすべて反抗したのではな
い。例えば、「詩言志」へ「夔齋六十自定稿 自敘」で云う如く、「毛詩」
の序の考えや、また、「詩譯」その二で、「詩は以て興る可く、以て
觀る可く、以て群すべく、以て怨む可し」に盡く。漢、魏、唐、宋の
雅俗、得失を辯ずるに此を以てし、三百篇を讀む者は必ず此れなり。」
と、主張し、「夕堂永日緒論」その一でも、「興觀群怨 詩は是に盡
く」といふのは、「論語」「陽貨篇」に引用する孔子の言葉である。この
ように、船山の心の中には何か傳統の重みというものが何時も強く存
在しているように思われる。それは、若き日に科擧の爲に學んだ儒學
であったと思う。それ故か、彼の行爲は儒者的であり、後人からは儒
者として批評されている。それを物語る如く、「清史稿」の本傳は
「儒林」にその名があり、「清儒學案」にはその著述が集められてい
る。故に、反儒教的であった李贄の言動に強強い反對の意を示したの
である。即ち、船山のように反抗精神に富んだ人においても、儒教的
な色彩は忘れられないのである。然し、船山はこれらを乗り越えて、
且、新しい文學論を展開しようとした。即ち、船山の抵抗の文學論と
は、明末清初の時流、船山にいわしむれば當時の俗流の缺陷に對し強

く反骨精神をかかげたのであり、どちらかといえば、その主張は復古
的革新であった。即ち、船山の説の如く、宋も明の文學も不可となれ
ば、當然、唐以前にさかのぼらなければならぬ。これは、船山がも
つとも反對をした李・何・李・王の説に近いことになる。船山の考え
は、理論的に古代や唐の文學に偉大な價値を發見したのでない。結論
的には文學の根本について考えようとしなかつたし、考える精神的
餘裕もなかつたようである。このことは非常に重大な意味を持つ
で、將來再び考えてみたいと思う。

一四

然らば、このような表現に現われた反抗文學論の生じた理由は何ん
であらうか。まず、考えられることは、船山が湖南人であるといふこ
とである。それは湖南の風氣は人も知る如く、北方 黄河の文化圏と
は甚しく異なるものがある。即ち、言語も、風習も、著るしく異つてい
る。それ故、北方文化に對する抵抗精神というものが芽ばえていたよ
うに思う。その爲その風土の中に、何か權力に對する強い反抗精神が
存在するように思われる。船山のそれも、この風土の持つ力の自然の
現れと思われる點がある。これは、船山より、後世のことであるが、
中華民國の時代に、湖南人が行つた反逆、中共起義もこの精神によつ
て起されたように思われるが、この點については問題提起をして、專
家の御教示を待つ。

次に船山の傳記によると、彼は明の崇禎十五年、舉人に合格した
爲、明の王朝には非常な忠誠心を持っていた。また、中國の傳統的な
考えによれば、その王朝と運命を共にすべきと考えていた。その證と
して「自題墓石」へ「夔齋文集補遺」に「有明遺臣行人王夫之」と述べ

ている。なお、「晝齋公行述」へ「船山遺書」⁽⁴⁾によると、十一世祖、諱は仲一が明の太祖に従い、天下を定め、その功により、賞を授けられてから、明王朝と深い關係を持ったようである。そうしたことは異民族であり、夷狄と考えていた清朝に對する強い反抗となり、その反抗はさらにその權威に對する反抗ともなつていったと考える。

このようなことが、次第に船山をして時流からはみ出さしめてしまつた。俗にいう一匹狼とさせてしまつた。それに、船山は清朝には仕えず明の遺老としてその一世を送つた。即ち民間人であるが故の自由もあつた。このようなことは、すべての權威に對し、屈服せず、比較的自由に物が云え、考えられたものではあるまいか。若しも、船山が清朝の役人となつていたならば、より多くの制約が自然と存在し、このように自由に物が云えなかつたと思う。以上の點が、船山の文學思想の中に反抗的な精神がより多く見出される理由の一つかと思われる。

一五

次に大きな特質として、船山の文學論には唐代表文學論への傾斜が著しいといふことである。すでに、船山がいくつかの唐代表文學論關係の書を熟讀していたことは「晝齋詩話」の中の「夕堂永日緒論」「外編」その十、その十一などで唐の皎然の「詩式」を、「詩評」その十一で、唐の司空圖の象外説を論じていることなどから推察ができる。特に、皎然の「詩式」については船山は詩に關する法則性に對し、前述の如く、強く反對をしているが、船山の文學論をよく考察してみると、逆に、それから強烈な影響を受けているようである。即ち、船山の詩論で、その文學表現に意を重んずることは、すでに、多くの學者によつてしばしば指摘されており、これは、船山の文學論の代表的な意見と

して、また特質ともされている。今、その論點を明言する爲に、その特質を示す資料のいくつかを引用し、それに私見を加えると、例えば、「夕堂永日緒論」「内編」その二で

詩歌と長行文字とに論なく、俱に意を以て主となす。意は猶お帥のごとなり。帥なきの兵は之を烏合という。李・杜の大家と稱する所以のものは、意なきの詩 十に一・二を得ざるなり。煙雲泉石、花鳥苔林、金鋪錦帳、意を寓すれば則ち靈なり。

という。船山にいわしむれば、詩文においてその内容に意がなければならず、意のないのはあたかも軍隊における統率者のないようなもので、文學作品の内容における根本に存在するものという。具體的にいうと、李白や杜甫という名手の作品をみると、十の中の一・二もないものはない。例えば、花鳥風月のようなものも意を含めて表現すると、靈魂でも持たつたように生き生きとしてくと主張する。そして、その三でも「意を以て主となし、勢は之に次ぐ。」と重ねてその説を繰返す。そして、「外編」その十一で

一篇 一意を載す。一意なれば則ち自ら一氣、首尾 成に順う、之を成章という。

と、文學表現における意の統一性を説き、その重要性を強く主張する。そして、このような立場から、「詩評」その三で

「采采芣苢」へ「詩經國風」意は言の先に在り。亦た言の後に在り。從容として涵泳すれば、自然にその氣象を生ず。即ち、五言中、十九首も猶お此の意を得る者 有るがごとし。陶令は差能く彷彿す。此より下りては絶えたり。

と、王羲之の言として傳えられる「意在筆先」をいい變えて、これを主張し、詩經國風の「芣苢」の章、古詩十九首、及び、陶淵明の作は

すべてその詩の中に意が含まれているという。然し、それ以後の作か
らは絶えてしまったという。この考えは前述の李杜の作にはより多く
意が存在するという考えと「夕堂永日緒論」「外編」のその九の「西
漢盛唐皆以意爲主」と甚しく矛盾する。恐らく、この三つの著述の成
立が時間的にずれていた爲、船山もその矛盾に気がつかなかつたので
あろう。そして、「詩譯」その十四で

謝靈運は一意 回旋往復し、以て思理を盡くす。之を吟ずるに、人
の下躁の意をして消えしむ。

といい、また、「夕堂永日緒論」「内編」へその三〇で
意を以て主となし、勢は之に次ぐ。へ中略へ 唯だ謝康樂のみ能くな
す。

という。つまり、謝靈運の作品には意をよく含んだものがあり、靈運
を名手と稱えるが、その具體的作品は示さない。

以上のように、その作品の表現に意を重んじ、主張することが強烈
であった。このようなことは、中國文學批評史の流れをみると、古
く、劉勰の「文心雕龍」「神思篇」で、「意は思に授かり、言は意に授
かる」と、意の必要性を説き、鍾嶸の「詩品」でも、その序で、「夫
れ、四言は文は約にして意は廣く、風騷に效を取らば、便ち多く得べ
し。毎に文の繁にして意の少きを苦しむ。故に世 習うこと罕なり。」
と四言詩の特質を述べる中で、意の重要性を説く。或は、「文已に盡
きて意の餘り有るは興なり。」と説明し、また「若し、但だ賦の體を用
いば、患は意の浮なるにあり、意 浮なれば則ち文散んず。」と主張
する。このような傾向は、唐代から宋代にかけても重要視されてい、
宋の魏慶之の「詩人玉屑」にも詳論がある。それ故、船山の重意主義
も、この流れの中の一つであるが、特に、筆者が唐代のそれへの傾斜

が甚しいのではないかというのは、船山の論說の中で、「文心雕龍」
や「詩品」或は「詩人玉屑」などの書名が見當らないし、熟讀したこ
とを示す資料が實證し得ないことである。

そして、「詩式」については、その法則性に反對をしているが、そ
の反對の論理は「詩式」を熟讀した結果、主張しているような點が認
められるからである。即ち、「詩式」には意についてしばしば重要な
項目としてこれを説明する。例えば、「明作用」で

作者 意を措う。聲律 有りと雖も作用を妨げず。

といい、「重意詩例」では

評に曰く、兩重の意 已に上る。皆、文外の旨、若し、高手 康樂
公の如きに遇はば、覽りて之を察せよ。但だ情性を見て文字を觀
ず。蓋し、道に詣るの極なり。

と説明し、謝康樂、即ち謝靈運を巧みな人と稱えている。この評價は
前述の「詩譯」や「夕堂永日緒論」で謝靈運の作品はよく意を含むと
指摘されたことと一致するからである。

また、このような考えは唐の王昌齡の説として、空海の「文鏡秘府
論」の「論文意」に

凡そ詩を作る體、意は是れ格、聲は是れ律。意 高ければ則ち格
高く、聲 辨なれば則ち律 清し。格律 全くして然して後 始め
て調 有り。意を古人の上に用ゆれば、則ち、天地の境、洞焉とし
て觀る可し。

と論じているのが見出される。即ち、唐代の文學論としては大切な論
點であつたようである。船山が王昌齡「詩格」を讀んだかどうかは疑
問であるが結果として謀らずしも暗合している。このように彼は重意
論を展開させていったのであるが、問題はこれらをさらに深めて追究

しようとしなかつたことである。即ち、ほとんど發展をしていないことは、前述の抵抗の章で論じたのと同じで、注目すべきことである。

一六

また、船山は詩文を作るには意について、勢ということが大切だと、前述の如く、強く主張する。これについて、すでに、青木正兒博士はその著「清代文學評論史」で、唐代の文學論にもこの考えが存在すると、指摘されているが、筆者は一步進んでこの考も「詩式」のそれを強く受けたものと考ええる。勿論、詩文の製作に勢という主張が大切なことは、早くも、「文心雕龍」の「定勢篇」で特に一章を設けて論じている。今その主な論點を利用すると

夫れ、情致は區を異にし、文變は術を殊にす。情によつて體を立て、體につきて勢を成さざるは莫きなり。勢は利に乗じて制を爲すなり。機の發して、矢は直に、潤は曲りて湍の回るが如きは、自然の趣きなり。圓なる者は規の體にして、其の勢や自ずから轉じ、方なる者は矩の形にして、其の勢や自ずから安んず。文章の體勢もかくの如きのみ。

と述べている。即ち、文學表現における勢について自然の力に沿う可きであると説くが如く、古くから中國では意識され、論じられているのである。この類の傳統をふまえて、船山は「夕堂永日緒論」「内編」その四十一で

畫を論ずる者曰く「咫尺 萬里の勢 有り」一の「勢」の字、宜しく着眼すべし。若し、勢を論ぜずんば則ち萬里を咫尺に縮むのみ。直に是れ廣輿記の前の一天下の圖のみ。五言絶句は此を以て落想時の第一義となす。唯 盛唐人のみ能く妙を得たり。

といひ

「君家住何處、妾住在横塘、停船暫借問、或恐是同郷」の如き、墨氣の射る所、四表 窮むるなし。字のなき處、皆その意なり。李獻吉の詩に「浩々長江水、黃州若箇邊、岸回山一轉、船到撲樓前」固り自ずと此の風味を失わず。

と、具體的に例を用いて説明する。船山にいわしむれば、畫論でいう「咫尺 萬里の勢 有り」ということは、文學の表現においても特に大切であり、必要だと力説する。それは、畫において勢がないならば、それはたんなる縮圖であるという。そして、特に、五言絶句には必要であるという。船山のこの理論は確かに畫論から發していることは誤りではないが、それを詩の世界に結びつけていることの背景には、文學論における前述のような傳統を意識していると思う。

ただこの意識が「文心雕龍」のそれであるとは急にはいい難い點がある。それは、前述の重意論の場合と同じことが、この場合にも、云えるからである。即ち、船山の「勢」に関する意識は重意論と同じく、峻然の「詩式」より多くのヒントを得ているのではあるまいか。それを物語るものとして、「詩式」の「明勢」に

高手の述べて作るは荆巫に登りて三湘・鄆・郢の盛を觀る如く、繁回盤礴、千變萬態 或は天の高峙を極め、峯焉として群せず。氣は騰し勢は飛ぶ。合沓して相屬す。或は脩江歌々。萬里 波なし。嶽出高深重複の狀、古今の逸格 皆その極に造る。

と、名手の詩文を作るは、名山に登り、天下を望めるような氣が表現されているという。尙、同じような意見が「文鏡秘府論」「論文意」に王昌齡の言として記される。即ち

高手の勢を作す、一句更に意を起す。その次は兩句 意を起す。意

は湧煙の地より天に昇り、向後 漸く高きが如し。漸く高くして階して上るべからず。

と、意と勢と關係して述べているので唐代にはすでに船山のそれに近い考えがあった。恐らく船山も「詩式」などを讀みこのようなものから自然とそのヒントを得たものであろう。それ故か、この勢を得たる者は盛唐の詩人のみ巧みであると云う。

一七

さらに、船山は前述の如く、賈鳥の故事による「推敲」ということを否定することは前述の通りである。この推敲を否定するということは、即ち、ある事柄を表現するについて、感じたまま、見たままを表すことである。このようなことを文學表現で善とする考えも、すでに唐代の詩論にはしばしば見出されることである。例えば、「文鏡秘府論」の「論文意」に引用される王昌齡の言として

凡そ、文章は皆難からず。又、辛苦せず。文選の詩に云うが如し。「朝入譙郡界、左右望我軍」へ王粲「從軍詩」第五首皆 此の例の如く難からず辛苦せざるなり。

とある考えに近くなる。ただ、この文は日本に長らく傳承しておったので、中國では近代になって紹介されたものである。随つて、船山がこの論文意の影響によつたと考えられないが、唐代にすでにこのような考えが存在したことは實證され得るし、また後にも自然と存在し得るし、さらにこのような考えが發想され得たと思う。特に、感情の起伏の激しかった船山の性格から考えて推敲ということは餘り好まれなかつたのであろう。

一八

さらに、船山は「詩譯」その十一で

「池塘生春草」と「胡蝶飛南園」の妙なるを知れば則ち「楊柳依依」
《詩經 小雅 采薇》「零雨其濛」《詩經 豳風 東山》の詩に聖なるを知る。司空表聖の所謂「規するに象外に以てし之を圖中に得たるものなり。」

と説明する。が、「池塘生春草」と「胡蝶飛南園」の句とは「夕堂永日緒論」「内編」その四にも引用され、前者は宋の謝靈運の「登池上樓」の詩の句、後者は晉の張協の「雜詩」の句で自然のままをそのまま詠じたものである。「楊柳依依」の句は「詩譯」その四で

「昔我往矣、楊柳依依、今我來思、雨雪霏々」は樂景を以て哀を寫し、哀景を以て樂を寫す。一倍 その哀樂を増す。

と、論じている。これらの資料から考えると、その表現と内容は船山の好みに合していたのであろう。特に、「采薇」の詩について、船山が「詩經」について論じた「詩廣傳」によると

往は悲なり。來は愉に歸するなり。往きて楊柳の依依たるを詠じ、來りて雨雪の霏々たるを歎ぐ。善くその情を用ゆる者は天物の榮凋を斂めず、已の悲愉を益すのみ。

と、前述の「詩譯」その四の意を重ねて主張している。即ち、船山は如何にも哀樂の二つの感情を巧みに言外に表現していると考えていたようである。また、豳風の「東山」を論じ

天地の際、新故の迹、榮落の觀、流止の幾、欣厭の色、吾が身に形する外なる者を以てするは化なり。吾が身に生ずる内なる者を以てするは心なり。

と論ずる。随つて、船山は司空圖、即ち、字でいえば表聖が「所謂規以象外得圖中者也」と云うに似ると、この句を引用する。問題は司空表聖のこの言葉が如何なる意味で何から引用したかということである。筆者には、現在寡聞にして本文と同じ句を見出し得ないが、ほぼ同じ表現なら、司空圖が詩經の評語の概念を規定した「二十四詩品」の「雄渾」の條に「超以象外得其環中」と見出される。すでに、この問題について、筆者は「司空圖の『酸鹹之外』について」へ東京支那學報 第五號で論じたことがあるが、今、論理の展開上、「雄渾」の章を解釋すると

大用へ大なる使いみちへ外に腓すればへ變化することへ眞體へまことの姿へ内に充つ。虚に返り渾にへ渾沌へ入り、健を積むを雄となす。萬物を具備し、太空に横絶す。荒々たる油雲 寥々たる長風、超ゆるに象外に以てし、その環中に得たり。之を持する強に非ず。之を來すこと窮りなし。

のように讀み取る。本論でいうこの象外という文字は早くも後秦の僧肇の「肇論」に見出されるので、「無心無識。無不覺知。斯則窮神盡知。極象外之談也。」とある。即ち、象は形であり、象外とは形によつて表現された以外に存在しておるものである。これはもとの象とは全然 別の世界、つまり、次元を異にした世界に存在するものである。このようなことを、宋の惠洪は「冷齋夜話」へ卷六で

唐僧 佳句多く、其の琢句の法 比物 意を以てして、指して某物と言わず。之を象外の句と謂う。

といい、その例として

無可上人の詩に「聽雨寒更盡、開門落葉深」と曰い、是れ落葉を以て雨聲に比するなり。又「微暘下喬木、遠燒入秋山」と曰い是れ微

暘を以て遠燒に比するが如し。

と説明しているのは、船山のそれに甚しく近い。船山が司空圖が「規するに」といったのは「正すに」の意であり、「圖中」という意はつまり、「かこみの中の意」では「環中」と同じ意味である。ともかく、文字の異動はあつても、船山が詩文における象外を尊重したことはこれで知ることが出来る。勿論、このようなことは、これに近い言葉として、含蓄とか、餘韻とかいう文字でも表現され得て、中國では古くから尊ばれたものである。船山はそれらを踏まえた上で、司空圖によつて再認識されたこの象外という文字のもつ意味を用いて、詩文を鑑賞していたのである。

一九

以上のように、船山の文學論の中により多く唐代の文學論に根底のある理論の影響が見出される。問題は、何故に、このように唐代の文學論の影響が船山のそれに濃厚にあるかということである。それについて、まず、考えられることは、明代になると、唐代の詩論書が珍重され、出版されたことである。皎然の「詩式」も入手し易くなったのか、王世貞の「藝苑厄書」にも、謝榛へ一四九五—一五七五の「四溟詩話」にも散見する。

次は、船山は唐詩、特に盛唐詩を尊重したことは「晝齋詩話」の諸篇に記されておるが、これがまた唐代詩論へ傾斜させる一つの原因ともなつたと思う。即ち、唐詩の多くが少くともこのような理論を背景に特に持ちながら創作されることが多かったからである。

二〇

然らば、このような方向にあった船山のこれらの理論に對し、如何なる批評が當時あつたか、如何なる影響が後世にあつたかとなると、現在、残っている資料からみて、餘りなかつたようである。それは、船山の著述がまとめられて刊行され、入手し易くなつたのは前述の如く、よほど後のことである。その爲、一般に見難かつたことも大きな理由の一つである。さらに、船山の理論は中國詩に對する根本の問題に對する異論ではない。ただ、時流に對する反抗であり、思いつきであり、復古的であつたので、餘り興味を持れなかつたのであろう。その上、その主張は散發的にバラバラで、まとめられていないことも大きな原因であらう。そして、船山はどちらかというところ、當時文壇の主流派とは離れた別の存在であつた。その爲、比較的無視されていとも考えられる。

(附) 本論作製に當り、特に福井康順、小川環樹兩博士から御懇切なる御指導を得たことを記し、その學恩に深謝したい。

- 註(1) 船山の傳記は「清史稿」列傳二百六十七と「船山遺書」(同治刊本)の「薑齋公行述」及び「王船山學譜」(張西堂著)などに詳し。
- (2) 薑齋詩話 文學出版社(一九六一年)刊、校正後記參照。
- (3) 註(1)(2) 參照
- (4) 最近刊行された主な單行本、
- 王船山學術論叢 稻文甫著 中華書局
 - 王船山史論選評 稻文甫著 中華書局
 - 王船山學術討論集(上・下) 湖南省哲學社會科學學術聯合會等合編 中華書局
 - 王船山學譜 張西堂著 臺灣商務印書館
 - 清代文學評論史 青木正兒著 岩波書店 四四頁—五三頁

王船山の文學思想について

中國文學批評史 郭紹虞著 新文藝出版社 一九五五年刊、以下中國文學批評史と稱するは本書による。

この他、前述の「王船山學術討論集」、「王船山學譜」などにも論じられてゐる。

- (6) 前述の「王船山學術討論集」(下)四六六頁—四九二頁
- (7) 中國文學批評史 四四頁の「從王夫之到王士禎」の章で「船山論詩雖本儒家見地頗多精關的見解」と云つてゐる。
- (8) 小論で引用する「詩譯」「夕堂永日緒論」「南窓漫記」などの番號はすべて一九六一年刊の人民文學出版社本「薑齋詩話」による。
- (9) 清史稿の本傳に「所著書三百二十卷。其著錄於四庫者曰周易稗疏、攻異。尙書稗疏。詩稗疏、考異。春秋稗疏。存目者曰尙書引義、春秋家説」と記される。
- (10) 船山遺書(早大圖書館藏 同治刊本)に「船山遺書目錄」によると、「子類十七部已刻十一部都五十一卷。未刻一部三卷。未見六部無卷數。集類三十三部已刻二十五部都四十八卷。未刻五部十二卷。未見五部無卷數」とあり、この他に、補刻三部が記録される。
- 尙、京大人文科學研究所藏の太平洋書店本(民國二十二年刊)には同治本に記録されないのが多く記載されていると、福永光司氏から御教示された。
- (11) 文學出版社本「薑齋詩話」校正後記に詳しい。
- (12) 庚午の年は一六三〇年、船山十二歳の時と、一六九〇年七十二歳の時と二度ある。
- (13) 「古詩評選」は、卷一古樂府歌行。卷二四言、卷三小詩、卷四五言古詩(漢至晉)卷五五言古詩(宋至隋)卷六五言近體をおさめる。このテキストは太平洋書店重刊本に見出される。
- (14) 「船山遺書」二十(早大圖書館藏本)による。
- (15) 前述の二五による。

(16) この理と勢については「王船山學術論叢」稻文甫著の「理勢常變博約等」の章に詳論がある。

(17) 螢雪軒叢書〈近藤元粹編〉第四卷「滄浪詩話料謬」滄浪云不落言筌。不涉理路。の條參照。

(18) 夕堂永日緒論 外編 その二十二

「以撮弄字句爲巧、嬌吟蹇吃、恥笑俱忘。如『戰戰兢兢 如履薄冰』而撮云『冰兢』『念終始典于學』而撮云『念典』。乃至市井之談、俗醫星相之語、如『精神』『命脈』『遭際』『探討』『總之』『大抵』『不過』、是何汚目聒耳之穢詞、皆入聖賢口中、而不知其可恥。此嘉靖乙丑以前、雖不雅馴者、亦不至是。湯賓尹以嫖娼小人、益鼓其焰、而燎原之火、卒不可撲、實則田一儂、黃洪憲倡之於早也。

(19) 「古意」沈佺期作。全唐詩 卷九十五

古意。呈補闕喬知之。一作古意。又作獨不見。盧家少婦鬱金堂 海燕雙棲玳瑁梁 九月寒砧催木葉 十年征戍憶遼陽 白狼河北音書斷

(20) 「正月十五夜」蘇味道作 全唐詩 卷六十五

「火樹銀花合、星橋鐵鎖開、暗塵隨馬去、明月逐人來、遊伎皆纈李、行歌盡落梅金吾不禁夜、玉漏莫相催」

(21) 「擣衣」杜甫作

「亦知戍不返 秋至拭清砧 已近苦寒月 况經長別心 寧辭擣衣倦 一寄塞垣深用盡閨中力 君聽空外音」

(22) 「秋興」八首 その四 杜甫作

「聞道長安似奕棋 百年世事不勝悲 王侯第宅皆新主 文武衣冠異昔時 直北關山金鼓振 征西車馬羽書遲 魚龍寂寞秋江冷 故國平居有所思」

(23) 梁の鍾嶸の「詩品」の序に曰「謝客乃元嘉之雄、顏延年爲輔、斯皆五言之冠冕、文詞之命世也。」

(24) 前述の太平洋書局本、「船山遺書」所收の「明詩評選」には樂府五首、歌行四首、四言一首、五言律十五首、七言律五首五言絕二首、を選人で載す。

(25) 茅鹿門の「唐宋八大家文抄」については「四庫全書簡明目録」集部、總集類に簡單な解説がある。

(26) 夕堂永日緒論 外編 その十「鉤鎖之法、守溪開其端、尙未盡露痕迹、至荊州而以爲秘密藏。茅鹿門所批點八大家、全恃此以爲法、正與皎然詩式同一陋耳。本非異體、何用環紉。搖頭掉尾、生氣既已索然。故將聖賢大義微言、拘牽創裂、止求傀儡之線牽曳得動、不知用此何爲。

「内編」その十二、「海暗三山雨」接「此鄉多寶玉」不得、迤邐說到『花明五嶺春』然後彼句可來、又豈管無法哉。非皎然、高標之法耳。若果足爲法、烏容破之。

(27) 詩式については拙稿「今本詩式についての疑」へ日本中國學會報 第七號參照。

(28) 船山が門庭を否定した裏面には、小川環樹博士の小生への御指教によると「船山のこの説はなほだ矯激なるに似たり。若し文學史として之を觀れば不公平と言はざるを得じ。然れども此必ず別に指す所あらん。蓋し、彼の「宋論」の實は明代の歴史（あるいは政治）を評しつつ、名を宋に借りたると同じく、この種の論も恐らくは明代諸王の門客（とりまき）の弊害を暗に刺譏するならんと思わる。その名を指すこと今日に在りては困難なりと雖も、その意の存するところは揣測し得と考えらる。」

(29) 「和漢漢」とは小川環樹博士は「附和雷同の人を謂うか。未だ知るべからず」と御教えを受けた。專家の御教えを乞う。

(30) 吉川幸次郎博士著「錢謙益と清朝經學」へ京大文學部研究紀要 第九號へ十五頁

(31) 韻府群玉へ元・陰時夫撰 二十卷へ廣輿記へ清・蔡方炳撰へ四庫提要

に解説あり。「詩學大成」宮内廳書院部「和漢圖書分類目錄上」に「李攀龍・胡文煥校二十四卷本本あり（未見）」「萬姓統宗」については不明。小川環樹博士の御教えによると「詩學大成」は天理圖書館にもあるとのこと、「萬姓統宗」は明代には人名辭典として用いられた由。

(32) 入矢義高著「公安から竟陵へ」〈京大人文科學研究所創立二十五周年記念論文集〉

(33) 小川環樹博士の御教えによると「措將去」は俗語なり。適譯は易からず、措き將て去れと訓讀すれば可。湊泊の泊或いは拍の誤字か。前の湊合と類義語という。

(34) 中華書局刊本の「王船山詩文集」による。

(35) 船山遺書 二十四

(36) 船山貴書 三十一

(37) 前述の「錢謙益と清朝經學」中の「王陽明と李卓吾に對する評價」による

(38) 中國文學批評史「從王夫之到王士禛」

(39) 拙稿「清初詩話にあらわれた『溫柔敦厚詩教也』について」〈東洋文學研究 第十七號〉参照されたい。

(40) 現在、香港で研究中の長友 高木桂藏氏の來信によると、香港では湖南人をロバとのしる。ロバは自分でこう思ったらいくら打つても動かないという。何か湖南の風土の中に頑固な面があるのかも知れない。朱介凡編「中國風土諺語逆説」新興書局〈中華民國五十一年刊〉に「要得中國亡、除非湖南人死盡」という句がある。

(41) 船山遺書 一

(42) この事柄に關し、小川環樹博士から「雕龍を引かざる理由は恐らく駢文を論ぜざる故ならん。〈中略〉「雕龍」の書の明代に於て顯われたるは恐らくは楊慎の表章による。而して、夫之は楊慎に對して慄らざる所ありてに非るか」と御教え下さった。この點については將來、時間を得て

王船山の文學思想について

考えてみたい。

(43) 青木正兒博士著「清代文學評論史」四十七頁

(44) 前述の「清代文學評論史」五十頁

(45) 詩式のこの文はテキストによって相當文字の異動があるが、本論の成立上は餘り關係がない。詳しくは拙稿「詩式校勘記」〈東洋文學研究 第一號〉参照されたい。

(46) 謝靈運「登池上樓」〈漢魏六朝百三家集〉「潘虬媚幽姿 飛鴻響遠音

蕩霄雲浮樓 川作淵沈 進德智所拙 退耕力不任 狗祿反窮海 臥痾對

空林 衾枕昧節候 褰開暫窺臨 傾耳聆波瀾 舉目眺嘔嶽 初景革緒

風 新陽改故陰 池塘生春草 園柳變鳴禽 祁祁復幽歌 萋々感楚吟

索居易永久 離群難處心 持操豈獨古 無悶徵在今

張協の「雜詩」その八〈漢魏六朝百三家集〉

述職投邊城 羈束戎旅間 下車如昨日 望舒四五圓 借問此何時 胡蝶

飛南園 流波戀舊浦 行雲思故山 闔越衣文屨 胡馬顧度燕 風土安所

習 由來有固然